

## 『パリ草稿』における市民社会批判の方法と分業概念

(Die Methode der Kritik der bürgerlichen Gesellschaft und der Begriff der Arbeitsteilung in den "Paris-Manuskripte.")

山 梨 彰

### 序.

本稿は、マルクスの経済学研究の出発点である『パリ草稿』<sup>(1)</sup>にそくして、初期マルクスの市民社会批判の方法について、分業概念を検証素材としながら考察しようとするものである。初期マルクスの分業概念に関するこれまでの研究史では、分業概念が、生産諸力と生産諸関係の概念が鮮明になる前の過渡的な概念であるという視角からの研究が多かった<sup>(2)</sup>。本稿は、このような研究とは異なり、分業概念がマルクスの市民社会批判の方法と関連する固有の意義をもつものであるという視角から考察を加える。最近の研究においては確かに、マルクス思想における分業概念の固有の本質的な意義を主張する見解がある。たとえば、分業概念をマルクスの「市民社会論」の重要な一環とするような見解であるが<sup>(3)</sup>、本稿はむしろ、マルクスの市民社会批判にたいして分業概念がいかなる位置を占めるのかという点に注目せねばならないと考えている。

### (I) 市民社会批判の思想的基準

#### (1) 「本質諸力」と人間の本質

『経哲草稿』『第三草稿』には「本質諸力 (Wesenskräfte)」という概念が頻繁に登場する。この本質諸力の概念は、「人間の生産諸力あるいは生産的な本質諸力 (Produktions-oder produktive Wesenskräfte des Menschen)」(S. 220)といわれるように、『ドイツ・イデオロギー』以後に明示的になる生産諸力概念の原型と考えられる。しかも行論で述べるように、『経哲草稿』でマ

ルクスは人間の本質について、本質諸力概念と密接な関係の下で論じている。このマルクスの立論に関する以下の検討は、マルクスにおける人間論と生産諸力概念という筆者の大テーマの一環となるものである。

さて、『経哲草稿』『第一草稿』でマルクスは、つぎのように述べている。「[人間は生命活動をもつものとして規定されるとしても] それは人間が無媒介に融けあうような規定ではない。意識している生命活動は、動物的な生命活動から直接に人間を区別する。」(S.158) マルクスは、人間の類的性格を「労働、生命活動、生産的生活」(ibid) のうちに見、自己の生命活動を意識の対象とすることに人間の人間たる所以(=人間の本質)があるとする。人間は、本質にそなわるこの能力のゆえに、諸対象の諸属性を抽象(捨象)して、諸対象の共通性(類性)を認識することができ、「それぞれの種属の規準にしたがって生産することができ、対象に対象固有の規準をあてがうことができる。」(ibid)

以上のような人間の本質は、人間に固有の対自然的な「関係行為(Verhalten)」(S.189)において現象する<sup>(4)</sup>。人間は外的自然から相対的に自立した存在であり、生存を続けるためには自然との「不断の[交流]過程にとどまらねばならない。」(S.157) この交流過程、つまり自然との関係行為において人間に固有なことは、自然対象を諸属性の一総体として捉え、しかもその内のある属性を自己の欲求の対象とすることである。すなわち人間は自然対象の諸属性から、自己にとって有用な属性を発見し、それを加工する。この発見、加工の過程において、自然対象の「自然諸力(Naturkräfte)」(S.239)が顕在化し、人間の利用の対象とされる。なかでも重要なことは、人間が自然諸対象を相互に関連させることによって、単独ではもたない自然対象の潜在的な自然力を展開させることである<sup>(5)</sup>。

対自然的関係行為は、外的自然の自然諸力を開発するだけではない。人間は「諸対象によって措定され、その生まれからいえば自然である」(S.239) 存在である。このようなものとして人間は「動植物のように一つの受苦している(leidend)、制約をうけ制限されている存在」(S.240) つまり外的自然に対して受動的な存在である。だが同時に人間は、「諸素質、諸能力、衝動」(S.240) として存在する「自然的な諸力、生命諸力をそなえており、一つの活動的な

(tätig) 自然存在である。」(ibid) 自然に対して能動的に働きかけ、「諸対象を創造し措定する」(S. 239) 対象的な存在としての人間をマルクスは、「対象的すなわち物質的な本質諸力(Wesenskräfte)を装備され付与された生きた自然的な存在」(S. 238~9)と規定した。人間は、人間的自然としての固有の自然諸力、つまり本質諸力をもつのである。人間が外的な自然対象の諸属性を欲求の対象とし、自己にとって有用なものに加工するのは、この「対象的な本質諸力のもつ主体性(Subjektivität)」(ibid)にこそ基づく。自然対象の有用的加工の過程は本質諸力の対象化として、人間にとっての対象を産出するのである。それゆえにこの対象は人間の「本質諸力の一つの確証(Bestätigung)」<sup>(6)</sup>(S. 191)である。すなわち「人間によって作りだされた対象的世界」(S. 247)は、「外へ製作物として産出された人間的な本質諸力(zum Werk herausgebornen menschlichen Wesenskräfte)」(S. 234)を表示するものである<sup>(7)</sup>。

以上のように、自然の諸対象がもつ諸属性の発見、加工の過程において、外的自然の自然諸力が開発・展開されるとともに、人間的自然の自然諸力(=本質諸力)が開示・展開する。そしてまたこの過程において、人間はこれらの自然諸力を「領有」する。いいかえれば、「人間的現実性の領有(Aneignung)、すなわち対象に対する人間の個性の諸器官の関係行為(Verhalten)は、人間的現実性の表出行為(Betätigung)である」(S. 189)とマルクスが述べるように、対自然的関係行為は同時に、この関係行為において措定された対象の領有を含み、先に述べたことと合わせればこの対自然的関係行為は、対象化—領有の一連の過程として捉えられる。このことによって対自然的関係行為は、人間の本質を証したてる行為(Betätigung)に他ならない。この点を敷衍しよう。対自然的関係行為は、欲求実現のプロセスである。このプロセスを遂行するために、人間は自己の欲求を自覚し、意識された目的として措定せねばならず、さらに自然諸対象のもつ客観的な法則や相互連関の構造を意識し、それを目的実現のプロセスに組み入れねばならない。かくして人間は、自己の自然諸力(=本質諸力)と外的自然の自然諸力とを客観化し、このことによりこれらの諸力を認識し統制する能力を高め、有用的に利用し、さらにこれらの諸力の

統一的所産としての生産物を享受することができる<sup>(8)</sup>。

そして対自然的関係行為(=生産的活動を通じた、自然および自己の自然諸力の対象化—領有)は歴史的行為である。マルクスは言う。「自然は、客体的にも主体的にも、直接に人間の本質に適合するように存在していない。そして、あらゆる自然的なものが生成してこねばならないと同様に、人間もまた自己の生成行為、歴史をもっているが、この歴史は…意識をとまなう生成行為として、自己を揚棄してゆく生成行為である。」(S. 241~2)このような歴史的行為の累積において、人間は、外的自然の自然諸力を人間化し普遍化してゆく<sup>(9)</sup>とともに、これと相互規定的に、自己の自然諸力を人間化し普遍化してゆく、つまり本質諸力として現実化してゆく<sup>(10)</sup>。歴史の歩みにおいて人間の本質諸力は、対象的富として、同時に主体的富として開示、展開してゆくのである。

つぎに、意識している生命活動という先に述べた人間の本質は、人間相互間での関係行為においても現象する。人間が自己(=人間としての類)を生命活動の対象とする時、人間諸個人は自己を抽象(捨象)して、類という全体を意識する。さらにこのことにおいて諸個人は、自己を類の一員(=個体)として意識し、同時に他者を別の個体として意識する。諸個人は他の諸個人を媒介者として、類的=社会的な存在としての自己を意識するのである。そして諸個人が他の諸個人と相互的な関連を形成するのは、他の諸個人が自己の「本質の補完物(Ergänzung)」、「不可欠の一部」(MG. S. 279)であることに基づく。この意味で、他の人間は「人間にとって最大の富である。」(S. 195)諸個人の相互的な関係行為は、人間の本質にかなうものにはかならない。

そしてまた、「一般に人間が自分自身にたいしてもつ一切の関係は、人間が他の人間にたいしてもつ関係において、はじめて実現され表現される」(S. 160)とマルクスが言うように、人間の対自然的関係行為がそういうものとして実現するのは、彼らの相互的な関係行為に媒介されているからである。したがって、人間の本質諸力の対象化—領有のプロセスも、相互的な関係行為においてはじめて実現され表現される。だからこそマルクスは「類的諸力(Gattungskräfte)を創出することは、人間たちの働きの総体(Gesamtwirken)によっ

へのみ可能である」(S. 235)と述べる。ここに、本質諸力は、相互的な、類  
的=社会的な本質諸力としても規定されうる<sup>(11)</sup>。

このとき対自然的関係行為への内容は次のように捉え直される。人間の自然  
諸力の開示としての本質諸力の対象化において、諸個人の相互的關係行為もま  
た「対象性をもつように生みだされる。」(S. 247)このことは、生産物(物質  
的、精神的)が相互的關係行為の中での所産だということだけではなく、対象  
化行為の累積の中で相互的關係行為が諸個人の相互的関連という客観的な存在  
へと生成し形成されることをも意味している。すなわち「社会(Gesellschaft)  
は人間によって生産されている」(S. 186)<sup>(12)</sup>さらにまた、領有にも新たな規定  
が加わる。すなわち、「社会(Gesellschaft)という形態の中で、社会的な諸  
器官が形成される。したがってたとえば、他者との共同的な活動(Tätigkeit  
unmittelbar in Gesellschaft mit andern)などは、私の生命発現の一つの  
器官となっており、人間の生活を領有する一様式となっている」(S. 190)と  
いわれるように、相互的關係行為によって「人間に固有の本質諸力」(ibid)と  
しての相互的本質諸力が、諸個人の中に形成されるのである。それゆえに「社  
会的人間の諸感覚は、非社会的人間のそれとは別の諸感覚である。」(S. 191)  
この相互的本質諸力はとりわけ、相互的關係行為を、また生成(形成)した相  
互的関連の客観的な連関構造をそれとして認識し制御する力である<sup>(13)</sup>。

人間諸個人の「Gesamtwirken」によって創出されるこのような「類的諸力」  
は「歴史の成果としてのみ可能である。」(S. 235)すなわち歴史的行為としての  
相互的かつ対自然的関係行為の累積によって、人間諸個人は、相互的関連を  
普遍化するとともに相互的本質諸力も人間化し普遍化してゆく。この意味で、  
歴史は「人間的社会の生成行為」(S. 194)であり、「人間的労働による人間の  
産出、人間のための自然の生成以外のなにもものでもない。」(S. 197)

要約しよう。マルクスは人間を「社会や世界や自然のなかで目、耳等々〈の  
本質諸力〉をそなえて生きている人間的で自然的な主体」(S. 252)と捉えた。  
このような人間の本質、歴史貫通的な存在構造は、相互的関連の発展を通じて  
本質諸力を不断に発展させることであり、同じことだが逆に、本質諸力の発展  
を通じて相互的関連を不断に再生産し発展させることである。そしてこのこと

は、人間に固有の対自然的および相互的關係行為の相互規定的な運動に、これらの關係行為の歴史的な累積に基づくのである。かくて、人間の本質は歴史の歩みと不可分に存在する<sup>(14)</sup>。

## (2) 人間本質論と市民社会批判の論理

人間の本質は歴史貫通的である。それは人間の歴史を、動植物等の自然の歴史と異なるまさに人間の歴史として特徴づける。いかえれば、人間の本質は歴史を人間の歴史とする種差的な本質であり、歴史が人間の歴史であればあまねく妥当する普遍的なもの(=人間の歴史に共通の本質的な規定)である。

とはいえマルクスは、人間の本質それ自身を超歴史的に考察しようとしたのではない。マルクスにとって「全革命運動はその経験的基礎をも理論的基礎をも、私的所有の運動のなかに、まさに経済の運動のなかに見いだす」(S.185)のであり、彼の考察はつねに「国民経済的事実の分析」(S.160)、私的所有の諸法則の「概念的把握」(S.150)にその対象がおかれていた。すなわち「あくまでも「国民経済上の現に存在する事実」を対象にすえて、それじたいにとって内的な、したがって必然的な自己再生産の運動のメカニズム<sup>(15)</sup>を解明すること、つまり市民社会という「固有な対象の固有な論理<sup>(16)</sup>」を探求すること、これがマルクスにとっての課題であった。人間本質論もこの課題の遂行の一環であり、市民社会の批判的分析の中から獲得されたものである。

さて、『経哲草稿』のマルクスは、「人類の大部分が<市民社会において>…抽象的労働へと還元されるということは、人類の発展において、どのような意味をもつか」(S.99)、また「どのようにしてこの疎外は、人間的発展の本質のうちに基礎づけられるのか」(S.164)という問題、すなわち人間の歴史全体のなかに市民社会をどのように位置づけ、意味づければよいのかという問題を提起する。この問題提起は、マルクスが継承した、「歴史の運動にたいする表現」(S.230)としてのヘーゲルの「運動し産出する原理としての否定性の弁証法」(S.235)、つまり「存在するものはすべて自己の否定的契機の産出を媒介として自己を発展させる<sup>(17)</sup>」という弁証法的見地と不可分である。すなわち、この弁証法的見地からすれば、市民社会は本質諸力と相互的関連との発展過程(=人間の本質)としての人類史全体にとって、一つの契機、揚棄される

べき否定的契機（＝疎外態）として把握されるのである。人間の本質は彼岸的で超歴史的なものではない。歴史過程に内在し、特殊な歴史的社會形態のうちで特殊な形態において存在するものである。そしてまた、およそ人間の本質と無縁な社會形態が歴史的にありえない以上、歴史的な社會形態が人間の本質の特殊な形態をその基底にもつことは、それが歴史的に存立する根拠を与える。だが人間の本質は、歴史過程の全体における「対象的で自然的な本質」（S. 239）としての人間の生成行為である。したがってこの歴史過程全体にたいする特殊なもの、正に特殊なもの、否定的契機、すなわち揚棄されるべき人間の本質の特殊歴史的な疎外態であり、それが歴史過程の内部で否定されることにおいてはじめて人間の歴史に発展がありえ、人間の本質は新たな形態をとりうるのである。

このようにマルクスの人間本質論はまず、歴史的弁証法と結びつくことによって市民社會を歴史的、過渡的存在として位置づける。市民社會のいわば「歴史哲学」的批判である。

さらに、人間本質論と市民社會批判の論理との結びつきは以下のことにあると思われる。市民社會が歴史的に特殊な社會形態だという場合、その特殊性とはなによりも、市民社會を歴史的存立体たらしめる人間本質の特殊性、その特殊歴史的な形態規定性であろう。とすれば、この歴史的形態規定性を解明することによってはじめて、市民社會という特殊なものを正に特殊なものとして把握できる。市民社會における人間本質の、つまり本質諸力と相互的関連との発展過程の形態規定性—後期マルクスはこれを「物象化」と総括する—は、市民社會に独自のものであり、市民社會に内在し、市民社會を自立的な存在とする「固有の論理」である。この「固有の論理」が把握されることにより、市民社會の内的な運動法則、すなわち矛盾を内に含み自己を再生産するメカニズム、そしてこの矛盾を揚棄する内的動因が発見されるのである。

マルクスは、人間本質の歪みを市民社會にみるという告発の見地から市民社會を批判するのではなく、人間本質の形態規定性をそのものとして解明することによって市民社會を内在的に批判する。人間本質論はこの場合、人間本質の歴史的形態規定性の解明を媒介として、市民社會の内在的批判、「解剖学」の

基礎となる。

以上の市民社会批判の方法は、『バリ草稿』でどの程度具体化されているのか。このことを以下、分業把握を一検証項にして検討する。なぜなら、分業こそ市民社会における「類的活動の疎外態」(S. 213)とマルクスが捉えたものであり、市民社会批判の方法と人間本質論の関係を示すキー概念と思われるからである。

## (Ⅱ) 『経哲草稿』「第一草稿」と「ミル評註」<sup>(18)</sup>の分業概念

まず「第一草稿」前半部の分業概念に関して考察しよう。

「資本の利潤」欄の第二項「資本の利得」においてはじめてマルクスは、資本家が利得をひきだす手段としての「分業」(S. 114)の存在を指摘し、続く「労賃」欄第一階梯では分業の存在が労働者に及ぼす影響を次のように説明する。『国富論』では市場価格の運動が労働者、資本家、地主に同等な影響を及ぼすように説かれている。しかし「分業が高度に行なわれている場合は、労働者にとって自分の労働を他の部門へ向けるのはきわめて困難であ」(S. 92)り、それ故労働者は資本家に対する「隷属関係 (subalterne Verhältnis)」(ibid.)の下にあるために、市場価格の運動は労働者に「最も多く、そして無条件に損失をもたらす。」(ibid.)分業、すなわち「一定の労働部門への拘束」(ibid.)による労働者の一面化は、労働者を「失業するか、資本家のどのような要求にも屈服せざるをえなくさせ」(ibid.)ているのである。

かかる分業把握は、ひき続いて「労賃」欄の「社会のありうる三つの主要な状態」(S. 93)を論じた個所で一層展開される。そのうちの一つ「富が増進しつつある社会……労働者にとって唯一の有利な状態」(S. 94)において、分業は資本蓄積と同時に、そして労働者数の増加を伴なって拡大する。この結果は次の三点である。第一に、「分業は労働の生産力 (produktive Kraft der Arbeit) を高め、社会の富と洗練さとを高める。」(S. 98)とはいえ、このことは資本の蓄積運動にくみこまれているために、生産力増大は資本蓄積の進展を意味し、「労働者の生産物のますます多くの部分が彼の手から奪い取られ、労働者自身の労働が彼に対してますます他人の所有として対立するようにな

り……ますます資本家の手中に集中されること」(S.94)を意味する。第二に、「労働者はますます一途に労働に、しかも特定の、きわめて一面的な機械的な労働に従属するようになる。……労働者は、精神的にも肉体的にも機械にまで下落させられ、一人の人間から一個の抽象的活動となる。」(ibid.)第三に、「ただ労働だけする人間の階級が増加する。」(S.95)このようにマルクスは、資本蓄積と同時に進む分業の拡大を、労働者の一面化、抽象化を一層増大させ、彼らからの所有剥奪を一層進めることによって、労働者を資本にますます「隷属的にする」(ibid.)ものと捉えている。労働者の資本家への「隷属関係」を根拠づけるものという先に見た分業把握が、ここでは、分業の拡大が「隷属関係」の拡大再生産を招くという動的な把握へと展開されている。いずれにしてもマルクスは、市民社会の階級的敵対性を解明するという視角(S.149-50を参照)から、国民経済学を読みかえ、分業が労働者階級に否定的な作用しか与えないことを鋭く提起している。

しかし、以上の検討に示されているように、この時点でのマルクスは、市民社会の分業が人間の本質諸力と相互的関連の歴史的発展過程といかなる関係にあるかについて全く述べていない。この意味で人間本質論との関係を欠いた「第一草稿」の分業概念は、概念として全く未発展であり、経験的実在への命名でしかない。とはいえ以上の分業把握そのものは、市民社会を歴史的で過渡的な存在と認識するマルクスの方法態度の所産であり、その限りで後の分業概念の発展に組みこまれる一契機である。

次に「ミル評註」の分業概念について考察しよう。

マルクスが、「分業が前提されれば、私的所有の素材をなす生産物は、個々人にとってますます等価物という意義をおびる。……等価物は、等価物としての自己の実存を貨幣というかたちで受けとる。いまや貨幣が営利労働の直接の結果であり、交換の仲介者である」<sup>(19)</sup>と述べているように、「ミル評註」の分業概念は、「第一草稿」の資本関係の論理次元とは異なり、商品交換の論理次元の内に置かれている。すなわち「私的所有—(交換)—価値—貨幣という貨幣のGenesis」<sup>(20)</sup>の解明に即して論じられる。マルクスはこの「貨幣のGenesis」を労働の営利労働化としても捉える。すなわち私的所有の交換が前提されれば

ば、「労働は部分的に営利の源泉になり、……生産物は価値、……として生産される。」さらに交換の進展に伴ない「生産が多面的になればなるだけ、……一層労働は営利労働の範疇に包括され」ていく。そして営利労働化の進展は「仕事がますます一面化する」こと、「労働主体からの労働の疎外と偶然性」を生むことを意味する。

以上を総括してマルクスは言う。「したがって私的所有関係の内部では、＜貨幣という＞社会的な力が増せば増すだけ、またそれが完成にむかえばむかうだけ、人間は一層利己的になり、没社会的（gesellschaftslos）になり、人間固有の本質からますます遠ざかる。」すなわち、「人間的活動の生産物の相互的な交換が交換取引、暴利商業となって現象するように、活動そのものの相互的な補完と交換とは分業となって現象する」のである。かくして、私的所有の交換関係は、人間の共同本質（Gemeinwesen）としての「社会的（gesellschaftlich）な関係の反対物（Gegenteil）」であり、労働についてもまた「社会的な本質が専らその反対物として、つまり疎外の形態で定在するのだから、正に人間的労働の統一性は、ひたすら分割とみなされる。」要するに営利労働化に伴ない、「分業は人間をトコトンまで抽象的な存在に、つまり旋盤などにしてしまい、遂には彼を精神上、肉体上の不具者に変える。」このようにマルクスは、分業を人間の「社会的本質」（＝相互的関係行為）と明白に対立するものと捉える。

さて以上の考察に示されているように「ミル評註」のマルクスは、市民社会の分業と人間の本質とを一定の関係において把握し、問題の土俵を設定したという意味で「第一草稿」に比べて前進してはいる。しかしこの関係性の把握の内容は、分業の一層の深化が人間の本質の一層の喪失であるというものであり、分業と人間の本質とが相互に背馳しあう「反対物」、固定的な対立物とされるのである。ここには、市民社会の分業が、本質諸力と相互的関連の歴史的発展過程における必然的な通過点、一契機であるという観点はない。かかる理解からは、市民社会の分業がいかなる意味で人間本質の特殊な形態なのかという問いは生じえず、本質的に市民社会の内在的批判の論理とはつながりえない。

このように概念としての未成熟はあるにせよ、「ミル評註」の分業概念は、人間本質との関係が問われていること、後の社会的分業概念と係わる文脈で論じられていること、これらの点で後の分業概念の発展の中に契機として組みこまれるものに他ならない。

### (Ⅲ) 『経哲草稿』『第三草稿』の分業概念

「第三草稿」の最末尾の近くで、マルクスは国民経済学者たちの分業論からの抜粋、その註釈をした上で、「分業と交換とのこうした考察は最高度に興味深い」(S. 219)と述べ、分業の問題に新たな関心を寄せる。このことは、自らの分業把握を一新せんとするマルクスの姿勢を示していると考えてもあながち不当ではあるまい。

このことは、マルクスが次のように語っていることにも示されていよう。「分業と交換とが私的所有を基礎にしているということは、……国民経済学者には証明できない主張であり、彼らに代って我々が証明したい主張にはかならない。」(S. 219) このようにマルクスは、国民経済学の方業把握の枠組と自己のそれとの違いをはっきりと意識している。すなわち、「どのようにして分業に私的所有を基礎にしているのか」を証明しえず、分業の存在にとって私的所  
有は不動の前提だと考える国民経済学と異なり、マルクスは分業の存立根拠をより深い次元から解明し、市民社会の方業の歴史性を証明せんとするのである。

この観点からマルクスは、「分業の本質、……すなわち、類的活動としての人間の活動の、この疎外され外化された形態」(S. 213)と規定する。この分業の本質規定の内容は、国民経済学者—特にスミスとカルバクーの方業論の批判的検討を通じて次のように具体化される。

マルクスは『国富論』の方業論における「交換と分業とは人間的な才能の大きな差異を生みだすものとして認められるが、この差異は交換と分業とによってまたふたたび有用なものになる」(S. 220)という見解、いいかえれば市民社会における交換を通じた分業＝労働の結合というスミスの分業把握に焦点をあて、これを「分業は、疎外の内部での労働の社会性 (Gesellschaftlichkeit

der Arbeit) についての国民経済学的な表現である」(S. 213) と規定しなす。すなわちマルクスにとって市民社会の分業は、人間の相互的関連としての「労働の社会性」の疎外された表現、実現を意味するものに他ならないのである。

さらにマルクスは、スカルベクの『社会的富の理論』における生産力と分業に関する把握、すなわち「人間に内在する諸力は、彼の知性と、労働のための肉体的な素質である。社会的状態に起源をもつ諸力は、労働を分割する能力、種々の人間の間に種々の労働を配分する能力……である」(S. 216) という見解に注目し、次のように語る。「スカルベクは人間のもつ生産諸力あるいは生産的な本質諸力 (Wesenskräfte) を二つの部分に区分する。(1) 個人的な、そして人間に内在する生産諸力あるいは生産的な本質諸力、すなわち人間の知性と特殊な労働の素質あるいは能力、(2) 社会から一現実的な個人からではなく一由来した生産諸力あるいは生産的な本質諸力、すなわち分業と交換。」(S. 220) このようにマルクスは、分業が社会的な本質諸力であるというスカルベク分業論を継承しながらも、同時に、この社会的な本質諸力が市民社会においては「現実的な個人」から乖離しているとも把握する。したがってマルクスは、「分業と交換とは、類になつた活動および本質力 (eine gattungsmäßige Tätigkeit und Wesenskraft) としての人間的な活動と本質力の、明らかに外化された表現である」(S. 219) と規定するのである。

以上のように「第三草稿」のマルクスは、市民社会の分業の本質を人間の類的=社会的本質諸力と「労働の社会性」(=相互的関連) の疎外された実現、表現であると把握するに至った。この分業把握は、疎外されてはいても分業が人間本質の実現であるということ、および分業が人間本質の疎外された形態での実現にすぎないということ、この二重のことを含意している。分業の本質のこのような理解に基づいて、マルクスは「分業と交換とは私的所有を基礎にしている」という証明すべき命題を、「分業と交換とは私的所有の形態化 (Gestaltungen) である」<sup>(21)</sup>(S. 219) という命題に措定し直し、その上で次のように言う。「正にこのことの中に、人間的な生活がその実現のために私的所有を必要としたこと、同時に他方で、人間的な生活がその実現のためにいまや私的所

有の揚棄を必要としていること、の二重の証明が存している。」(ibid.) すなわち、第一に、疎外された形態であっても、市民社会の分業は人間本質の実現であるがゆえに、類的=社会的本質諸力と「労働の社会性」を発展せしめる。いいかえれば、「私的所有だけが、最も有益で最も包括的な分業をもたらすことができる」(S.217) という国民経済学を継承して、マルクスは市民社会においては分業が私的所有の形をとる (*Gestaltung*) ことによつてのみ、「人間的生活」が可能となると考えるのである。しかし、第二に、市民社会の分業は私的所有が形成している (*Gestaltung*) 分業であり、正に疎外形態であるがゆえに人間的生活の実現にとって揚棄されるべき一契機に他ならない。すなわち、分業が可能にする類的=社会的本質諸力と「労働の社会性」の発展は、市民社会の分業を基礎づける私的所有を否定するに至るのである。

以上のようにマルクスは『第三草稿』において、市民社会の分業が存立する根拠を類的=社会的本質諸力と「労働の社会性」という人間本質論の論理次元において捉え、私的所有が分業の不動の前提だとする国民経済学の無批判性をのりこえた。さらに、市民社会の分業の本質を、人間の本質の疎外された実現と規定し、この観点から、市民社会の分業を基礎づける私的所有の必要性とその揚棄の必要性を証明したのである。このように「第三草稿」のマルクスは、「第一草稿」と「ミル評註」を越えて、分業を人類史全体における揚棄されるべき契機、必要な過渡的存在として把握した。人間の本質という普遍的概念を含むものとして規定された分業概念は、かくしてマルクスの歴史認識を構成する概念の一つとして形成されたのである。

しかしながら、「第三草稿」の分業把握には、次の二点の限界があるといわねばならない。

第一に、分業が私的所有の *Gestaltung* として捉えられているにしても、いかなる歴史的経過においてこの *Gestaltung* が、つまり私的所有としての分業の形態形成がなされてきたのかという問題が解明されていないことである。この具体的歴史把握を欠くため、「どのようにして分業は私的所有を基礎にしているのか」ということの証明も半ばしか遂行されていない。マルクスは、市民社会の分業の歴史的形成過程を跡づけた『ドイツ・イデオロギー』においてこ

の課題に組みくむことになる。

第二の限界は、市民社会の分業が疎外態であることの内容がどのように把握されているのか、ということに係わるものである。「第三草稿」の「欲求、生産、分業」の末尾でマルクスが「われわれの考察すべき諸契機」(S.220)としている分業に関する断片的言及を再整理してみれば、この時点のマルクスは、分業が疎外態たることの内容を次のように捉えているように思われる。「私利利害」(S.219)に基づく分業によって諸個人の相互的関連が彼らに対して一面化、抽象化しており、このことに伴って諸個人は「分業によって……貧困化され、本質から疎遠になっている(Entwesung)。(S.220)さらに分業は、「資本の集中」(ibid)を伴うことにより「大量的な富の生産」(ibid)を可能にする一方で、労働を「単純な機械的運動」(ibid)、一面的な労働にする。以上のような把握が、市民社会の分業の必要性和その揚棄の必要性を語るマルクスの念頭にあったと推測することはできよう。しかしこの把握にもとづいて語りうるのは、あくまで「必要性」であって「必然性」ではない。なぜなら、マルクスははまだ、歴史的に特殊な運動法則の下に分業を包摂し、その中から分業の私的所有形態を廃棄する前提を形成する市民社会の「固有の論理」を解明していないからである。

すなわち、「第三草稿」の分業概念は、マルクスの歴史認識上の論理と接合されているにしても、この歴史認識の論理を前提とする市民社会の「固有の論理」、その内在的批判の論理との関係では位置づけられていないのである。『ドイツ・イデオロギー』での物象化論<sup>(22)</sup>を介した分業概念の展開は、この課題をはたそうとするマルクスの最初の試みとなるが、紙幅の関係上、本稿ではその内容を示唆することさえできない。

以上検討してきたように、『パリ草稿』のマルクスは、市民社会批判の方法を、人間本質論を媒介とする分業概念の展開によってしだいに具体化していったのである。歴史貫通的で最も本質的な人間の存在構造という論理次元にまで立ち返って、現状を批判的に把握する概念を形成していくマルクスのこの方法態度にこそ、今日の我々が学び及るべきものがあると思われるのである。

## (注)

- (1) 本稿では『パリ草稿』のうち、『経済学・哲学草稿』（『経哲草稿』と略）と「ミル評註」を対象とする。この両著作とも、Karl Marx, : *Ökonomisch-philosophische Manuskripte*, Verlag Philipp Reclam, Reclams Universal-Bibliothek Band 448, 1970, に収められており、本文ではこのバージョンのページ数のみを記す。但し、「ミル評註」については、ページ数の前に GM. と略記した。強調の傍点はいずれも原文のものである。なお、訳は『経哲草稿』は岩波文庫版、「ミル評註」は未来社版を参照し、訳者補註を〔 〕で、引用者補註を〈 〉で示した。
- (2) 例えば、内田一男『『生産関係』範疇の形成（Ⅰ），（Ⅱ）』、『山口経済学雑誌』第5巻第7・8号—第9・10号，中野雄策『分業』および『分業の廃棄』について、『山口経済学雑誌』第16巻第1号，第18巻第2号—第3号，仲村政文「社会的分業発展の論理—マルクス分業論の一考察」，鹿児島大『経済学論集』第2号，バガトゥーリヤ「K・マルクスとF・エンゲルスの『ドイツ・イデオロギー』第1章原稿の構造と内容」，花崎訳『新版ドイツ・イデオロギー』，合同出版，所収。
- (3) 望月清司『マルクス歴史理論の研究』，岩波書店，1973年。
- (4) 以下の叙述については根井康之『市民社会と共同体』，農山漁村文化協会，1979年，から示唆をうけた。
- (5) 根井同上書 151頁はこの点に関して，自然利用の歴史における火の使用の決定的に重要な意義を指摘する。
- (6) *Betätigung* と *Bestätigung* の概念については，宮本十蔵『哲学の理性』，合同出版，1977年，81～114頁を参照。
- (7) だから「産業の歴史と産業の生成しおわった対象的現存とが，人間的な本質諸力の開かれた書物である」—但し「疎外という形態のもとでの人間の対象化された本質諸力」—とマルクスは言う。『経哲草稿』，S. 192—3。
- (8) マルクスはこの点について，動物と異なる人間に固有な生産は，肉体的欲求から自由に生産すること，生産物に自由に立ち向かうこと，対象の固有の法則にしたがって生産できることだとする。同上書，S. 158。
- (9) すなわち，自然の利用範囲を拡大して，「人間は全自然を再生産する」（同上書，S. 158）ようになる。
- (10) すなわち，人間は自己を含む自然の客観的な法則や連関構造をしないで意識していき，単なる経験的知識から科学的認識へと発展させる。技術は，この知識，認識の客観的成果である。
- (11) マルクスが言うように，人間のもつ「特殊な人間的な感性的本質諸力は，〈他の人間的な自然としての〉自然的な諸対象の中でのみ自らの対象的実現を見いだすことができる」（『経哲草稿』 S. 195）からである。

- (12) この相互の関係行為の形態は、「共同的 (gemeinschaftlich) な、すなわち他者とともに同時に遂行された生命発現という直接的形態」(同上書, S.187)でもありうるし, Gesellschaft という媒介された間接的形態でもありうる。望月前掲書275~7頁を参照。
- (13) 本稿の註(10)の「自然」を「相互的関連」と読みかえよ。
- (14) G・マールクシュ『マルクス主義と人間学』, 高橋他訳, 河出書房新社, 1976年, 52~63頁を参照。
- (15) 細谷昂『マルクス社会理論の研究』, 東大出版会, 1979年, 54頁。
- (16) K.Marx, : Kritik des Hegelschen Staatsrechts, MEW, Bd. 1, S.296。  
また良知力『初期マルクス試論』, 未来社, 1971年, 7~28頁, 細谷同上書, 8~13頁を参照。
- (17) 梅本克己『増補人間論』, 三一書房, 1969年, 283頁。
- (18) 『経哲草稿』と「ミル評註」の執筆順序, および「第一草稿」内部の執筆順序に関しては, ラーピン「マルクス『経済学・哲学草稿』における所得の三源泉の対比的分析」, 細見訳, 『思想』, 1971年3月号, および山中隆次「『経済学・哲学草稿』と『抜粋ノート』の関係」, 同上誌, 同年11月号を参照。
- (19) 「ミル評註」からの以下の引用は, オベレクラム版S.265—8からのものである。紙幅の都合上いちいちページ数を記さない。
- (20) 杉原・重田訳『マルクス経済学ノート』, 未来社, 1970年, 189頁。
- (21) 「形態化 (Gestaltungen)」のもつこの場合の二重の意味については, 望月・岸本・森田「『経済学・哲学草稿』第三草稿」, 『マルクス・コメンタールⅡ』現代の理論社, 1972年, 103頁の示唆をうけた。
- (22) 「物象化」の問題については, 岩倉正博「物神性世界における法と経済—マルクス所有論の一研究」, 京都大『法学論叢』, 第99巻第1号, 第3号, 第6号が示唆的である。

(筆者の住所: 横浜市旭区中沢町53-6)